氏　　名	山岡　英功
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第　7539　号
学位授与の日付	2026 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Usefulness of D-dimer Assay to Confirm the Course of Overt VTE in Cancer Patients （担がん患者における顕性 VTE の経過確認に対する D ダイマー測定の有用性）
論文審査委員	教授 笠原真悟　　教授 大橋俊孝　　准教授 小谷恭弘

学位論文内容の要旨

担がん患者における静脈血栓塞栓症（VTE）は重大な合併症であり、血栓の存在は多くの場合、がん診断時に D-ダイマー値を測定することで評価される。D-ダイマーは VTE の検出に高い感度を示す一方で、特異度は低いことが知られている。抗凝固療法中における D-ダイマー測定の有用性については、広く用いられているにもかかわらず、十分には確立されていない。本後ろ向き観察研究では、担がん患者における抗凝固療法中の D-ダイマー測定が、経過観察期間中の顕在性 VTE の予測において有用かどうかについて検討した。
抗凝固療法開始後 30～100 日の間に D-ダイマー測定および造影 CT を実施した 60 例の担がん患者を用いた。D-ダイマーによる顕在性 VTE の診断能は感度 85.7%、特異度 87.2%であった。これらの結果より、臨床的には D-ダイマー値が陰性化するまで抗凝固療法を継続すれば、追加の侵襲的検査を行わずとも顕在性 VTE が存在しないことを推定できると考えられた。

論文審査結果の要旨

担がん患者における静脈血栓塞栓症（VTE）は重大な合併症であり、血栓の存在は多くの場合、がん診断時に D-ダイマー値を測定することで評価される。D-ダイマーは VTE の検出に高い感度を示す一方で、特異度は低いことが知られている。この研究では後ろ向き観察で、担がん患者における抗凝固療法中の D-ダイマー測定が、経過観察期間中の顕在性 VTE の予測において有用かどうかについて検討した。

抗凝固療法開始後 30～100 日の間に D-ダイマー測定および造影 CT を実施した 60 例の担がん患者を対象とした。D-ダイマーによる顕在性 VTE の診断能は感度 85.7%、特異度 87.2%であった。臨床的には D-ダイマー値が陰性化するまで抗凝固療法を継続すれば、追加の侵襲的検査を行わずとも顕在性 VTE が存在しないことを推定できると結論づけられた。

予備審査における疑問点、問題点：今回の研究デザインにおいて、担がん患者を対象としたが、その重症度や治療内容においての評価がなされていないために、D-ダイマー測定にばらつきがあることが指摘された。さらに血栓の画像診断が造影 CT ということで、その評価の信頼性において議論された。しかしながら、D-ダイマー測定が感受性のみならず、特異度も信頼性が高いことが示された事は、新たな知見であった。今回の研究結果は、今後どのように臨床に生かされ、治療法の再検討につながるかも検討していく余地がある。その上で、更なる研究の成果を期待したいと考えられた。

したがって、この結果は重要な研究成果と考えられ、価値ある業績と認められた。

よって、本研究は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。